

グローバル・ハウスホールディングの時代

遠藤 乾 北海道大学 大学院公共政策学連携研究部 教授

[講演の概要]

最近、ひっそりと人知れず亡くなっていた老人のニュースを耳にしはしないだろうか。背景にあるのは、有史以来初めての現象である。近年、日本では、一人暮らしの「ハウルホールド=家庭」の数が、全体の四分の一を超えた。これには、少子化、高齢化、晩婚化、都市化などさまざまな要因がそれにまわりついている。

これは、日本だけの現象ではない。隣の韓国、台湾、香港、そして中国大陸の沿岸部は、軒並み同様の傾向を示している。グローバル化の下で、投資—それとともに人—が都市沿岸部に集まり、気がつくると似たようなマンションに、単身者、子供のいない共働き夫婦（いわゆる **DINKS**）あついは夫婦に子供一人の家庭が数多く再生産されている。そこでは世代間バランスが崩れ、逆ピラミッド型の人口構成をした少子高齢化社会がひたひたと忍び寄る。いきおい関心が年金制度に向かいがちだが、ここで興味深いのは、これらのプロセスに伴い、介護、子育て、家事手伝いなど、広い意味でのケアが、国境を越えてグローバルに提供され始めていることだ。

この現象を「グローバル・ハウスホールディング」と呼ぼう。「ハウルホールド=家庭」とは、血縁家族よりも広い概念で、時に国境を越えてやってくるお手伝いさん、介護士、乳母やオーペア（家事手伝い留学生）、あるいは国際養子縁組、国際結婚などを射程に含む。この領域に着目するとき、グローバル化は、金融や技術のはなしだけではなくなるだろう。それは、少子高齢化のもとで、介護やケア労働を通じて、ハウルホールド=家庭のような親密圏にも浸透しつつあるのである。

本報告では、特に東アジアの事例に焦点を当てて、このテーマについて考えてみたい。

（参考：遠藤乾「学者が斬る・国境を越えるアジアのケア労働」『エコノミスト』
2008年1月22日号、46-49頁）

[プロフィール]

北海道大学法学部卒業、同大学大学院法学研究科修士号、ベルギー・カトリック・ルーヴァン大学 MA、オックスフォード大学政治学博士号。欧州連合(EU)委員会・未来工房専門調査員、イタリア・ヨーロッパ大学研究所客員研究員などを経て現職。主著に *The Presidency of the European Commission under Jacques Delors* (Macmillan, 1999)、共著に『非対称化する世界—〈帝国〉の射程—』(以文社, 2005)、『紛争現場からの平和構築—国際刑事司法の役割と課題』(東信堂, 2007) など。